

声楽初学者のイタリア古典歌曲による 学びに関する一考察

— 学びのプロセスに着目して —

枝川 一也・大野内 愛
(2022年10月7日受理)

Beginning vocal students' learning of classical Italian songs:
The process of learning

Kazuya Edagawa and Ai Oonouchi

Abstract: This study aimed to capture the reality of the learning process and to derive suggestions for future instruction based on the descriptions in the learning records of first-year university students taking vocal music classes. The descriptions can be classified into eight categories. (1) recognition of the situation, (2) mental state, (3) the basic content of vocal music, (4) understanding of classical Italian works and musical expression, (5) Italian pronunciation, (6) ensemble with piano, (7) learning from the appearance of others, and (8) connections with existing learning. We were able to capture aspects of the learners' learning that became more concrete and developed as the number of lessons increased. We found that the learners deepened their learning systematically as they repeated the lessons according to their situations. Recognition of their achievements seemed to lead to motivation and higher learning. In addition, there were not many descriptions of their recognition of their achievements. The learners' descriptions of the lessons on classical Italian songs indicated that they were given a wide range of content, but in addition, giving the learners a greater sense of "having done it" would lead to further acquisition of knowledge.

Key words: Vocal Music, Italian Classical Song, Learning Process

キーワード：声楽，イタリア古典歌曲，学習プロセス

1. 研究の動機と目的

筆者らが勤務する広島大学教育学部第四類音楽文化系コースでは、1～4年まで半期に1科目ずつ声楽実技の科目が開講されている。授業はグループレッスンの形をとっており、学習者1人ずつへのレッスンをクラス全員で聴講することになっている。声楽実技の場合、教材の学習順序に決まりがあるわけではないが、扱う楽曲の時代や種類を段階的に構成するのが一般的であろう。筆者らは、1年前期にコンコーネとイタリア古典歌曲、1年後期にシューベルト作品を中心とす

るドイツ歌曲、2年前期に日本歌曲、2年後期にフランス歌曲やロマン派の外国歌曲およびオペラアリアなどの順でシラバスを構成している。このように、各時期で扱う楽曲の種類には多少のルールを設けているが、その中での選曲は学習者個人が行っており、指導者は、学習者らが準備した楽曲の演奏に対してレッスンをしながら、実践的な方法で指導を行なっている。筆者ら指導者は、それぞれの学習者の実態に応じて、必要と考えられる指導をしているため、呼吸法、発声法、楽曲分析など多岐にわたる指導内容を体系化しているわけではない。こうした授業の中で筆者らが重要

視していることは、ある1曲がうまく歌えるようになることではなく、楽譜を読み、時代背景や作曲家の生まれ育った国や地域の文化を学び、表現を考えて、表出していくことのできる力の育成である。では、学習者たちはこうした授業を受けながら、どのようなことを学び、発展させているのだろうか。

そこで本稿では、学習者らが授業後に記入している学習記録の記述をもとに、学びのプロセスのあり様を捉え、今後の指導のあり方についての示唆を得ることを目的とする。

このような音楽の専門教育における個人レッスン（もしくはグルーブレッスン）の学びのプロセスについては、あまり明らかにされていない。その中でも、田中ら（2017）は、ピアノ初学者のピアノ個別指導の振り返りの記述から、質的分析手法の1つであるSCATを用いた分析を行い、田中らが考案した「ピアノ学習プロセス」の特徴として18の理論記述を導き、その構造的意味を抽出している。ここでは、対面個別指導や、自身の演奏の録音を聴くことなど、複数の学習方法を用いることによる学びの特徴を捉えている。また、近藤（2018）は、印象評価を用いて学習プロセスを捉えている。

これらの研究はさまざまな角度から学習プロセスの特徴を捉えているが、具体的な学習内容に着目した学習プロセスのあり様を明らかにしていない。そもそも学習者の実態に応じたレッスンが行われる音楽の実技指導では、最終的な成果を学習者による演奏で見とることが多いが、学習者の学びが必ずしも全て演奏という形で表出しているとは限らない。さらに声楽の演奏技術の向上のみを目指していない本学での声楽の授業では、学習者の学びの実態を把握することが必要であると考えられる。これまでに筆者らは、ドイツ歌曲を扱う1年後期の声楽授業の授業記録にある学生の記述からUserLocal社のテキストマイニングツールを用いて分析し「①ドイツ語の発音」「②楽譜から雰囲気を読み取った上での表現」「③求める表現のための発声のアプローチ」という大まかな学生の意識のプロセスを捉えた（大野内ら2021）。しかしながら、この学生の3つの意識は授業の進行に伴い偏りはあるものの、断続的に意識されており、発音、音楽表現、発声などそれぞれにさらに細かい学びのプロセスが存在する。本稿ではこの点に着目したい。

2. 対象とする授業の概要

本編では筆者らが担当している1年前期「声楽基礎研究Ⅰ」の授業を対象とする。履修者は音楽文化系コー

ス2022年入学生の1年生28名である。

本授業では、全音楽譜出版社『コンコーネ50番』および全音楽譜出版社『イタリア歌曲集1』をテキストとしている。なお広島大学はターム制を採用しており、本授業は4～5月の第1タームに週1回2コマ連続で実施されている。毎回の授業の初めにコンコーネを3曲ほど全員で斉唱し、その後1人ずつイタリア古典歌曲のレッスンを行う。グルーブレッスンの形をとっており、1人ずつのレッスンは、クラス全員で聴講する。学生は毎回の授業後に感想や課題などをプリントに自由に記入し、授業者に提出する。

3. 学生の記述内容の分析

(1) 分析方法

レッスンを伴う授業は全5回であり、5回分の学習者の授業記録を対象とする。記述内容をテキストデータとし、意味、内容の類似性に基づいてコード化し、質的コーディングをおこなった。

(2) 記述内容のコード化

学習者の記述内容をコード化したところ、8つのコードを抽出することができた（表1）。

この中で【状況の認知】と【精神的状態】については、自分自身を大まかに評価したり状況を説明したりしたものである。授業での学びに関するものは、それ以外の【声楽の基礎的内容】【イタリア古典歌曲の作品理解と音楽表現】【イタリア語の発音】【ピアノとのアンサンブル】【他者の姿からの学び】【既存の学びとのつながり】の6つであった。

学習者の学びに着目すると、まず【声楽の基礎的内容】では、声楽的な発声や呼吸、姿勢についての基礎的な点についての学びに関する記述が見られた。授業では、人前で1人で歌唱する緊張から学習者の体に無駄な力が入ってしまうことがあり、指導者は特に姿勢と呼吸について指導する場面が多くあった。また、学習者の多くが初学者であり、歌うことや息を深く吸っていくことに慣れていない状況もあった。

【イタリア古典歌曲の作品理解と音楽表現】では、レッスンの中で指導者が話した時代背景やイタリア古典歌曲の概要、バロック時代の作品の歌い方などを知識として受け取った上で、歌詞の内容の捉え方や、歌唱表現への活かし方、演奏表現の工夫についての記述が見られた。学習者の記述の多くが、この内容に関するものであった。自分が取り組んだ楽曲に関する具体的な表現方法を記述している場合もあれば、「○○の感情の表現方法の1つとして○○がある」などと一

声楽初学者のイタリア古典歌曲による学びに関する一考察
— 学びのプロセスに着目して —

表 1 記述内容のコード表

コード	定義	具体例
状況の認知	・練習不足の認知 ・練習成果の認知	自分自身の事前準備への評価や自分自身の学習状況の認知に関する記述
精神的状態	・緊張による影響 ・響きの環境の違いによる影響	人前での緊張状態やレッスン場所の変化などによる精神的状況に関する記述
声楽の基礎的内容	・発声・歌唱技術 ・呼吸・姿勢	声楽的発声、歌唱技術、呼吸、姿勢などの声楽に関する基礎的内容に関する記述
イタリア古典歌曲の作品理解と音楽表現	・イタリア歌曲の特徴 ・作品理解 ・楽譜の読み方 ・音楽の流れ、フレーズ感 ・演奏表現の工夫	イタリア古典歌曲の形式や歌唱法、時代背景、音楽史としての位置などを踏まえ、歌詞などから楽曲を理解し、どのように音楽表現していくかということに関する記述
イタリア語の発音	・正しい発音、アクセント ・朗読の必要性 ・歌における美しい発音 ・子音の処理	正しいイタリア語の発音やアクセントの位置、イタリア語の流れなどに関する記述
ピアノとのアンサンブル	・アンサンブルのポイント ・ピアノとのやりとり	ピアノと歌とのアンサンブルに関する記述
他者の姿からの学び	・他者の表現からの刺激 ・個々の表現方法の違い ・多様な曲への接近	グループレッスンでの他者のレッスンを聴講している学びに関する記述
既存の学びとのつながり	・これまでの学びとのつながり ・自分自身の経験とのつながり	これまでの音楽やその他の学びと関連させている記述

般化して記述している場合もあった。さらに、最近の流行歌やミュージカルのように拡声器がない場合の *pp* (ピアノシモ：非常に弱く) の表現の方法や、ドラマのようにビデオカメラが近距離で表情を捉えてくれない場合の感情表現の方法など、舞台での声楽表現に関する記述もあった。

【イタリア語の発音】については、レッスンに入る1週前にガイダンスの中でイタリア語の発音のレクチャーを実施したが、ガイダンスでの説明よりも、レッスンという実践の中でより深く学ぶことができたようである。また、授業では詩の韻律にも触れ、詩の朗読に特に力を入れたこともあり、朗読することによる歌唱への影響についての記述も多く見られた。さらに詩の朗読の際には、フレーズ感や文章の流れを意識させるよう声をかけていたことから、単なる正しいイタリア語の発音にとどまらず、音楽の流れを踏まえた美しい発音について記述している学習者もいた。

【ピアノとのアンサンブル】については、まずバロック時代の楽器が現代のピアノではないこと、弦楽器やオルガンの音色の想像に関する記述が見られた。また、伴奏経験の浅い学習者が多く、声楽の伴奏をする際の注意事項や合わせるコツに関する記述も目立った。歌い手とピアニストがイメージを共有し、どちらもが主体的に音楽を作っていくことの必要性に関する記述もあった。

【他者の姿からの学び】はグループレッスンの特徴

でもある。単純に自分が扱っていない楽曲を知ることができたという、多様な曲への接近に関する記述があった。また、授業では学習者が選んだ曲が他者と重複することもあり、そうした状況において他者のレッスンから歌詞の内容理解や表現の工夫について学んでいる様子が見られた。

【既存の学びとのつながり】では、幼少期や大学受験のために受けたレッスンでの指導と関連させて理解を深めていたり、自分自身のこれまでの経験の中から、曲の歌詞の理解につなげていたりした。

以上のように、学習者それぞれが選曲して練習したイタリア古典歌曲のレッスンをとおして、多面的な学びを得ている様子を捉えることができた。

4. 学びのプロセスの実態

では、それぞれの学びは授業の回数を重ねるごとにどのような深まりをみせるのだろうか。また、学びの深まりには、学習者の状況の認知や精神的状態がどのように関与しているのだろうか。ここからは状況の認知や精神的状態との関連も含め、それぞれの学びのプロセスの実態を捉えていく(図1, 2)。

(1) 【状況の認知】と【精神的状態】

学びのプロセスに関与していると考えられる、学習者の【状況の認知】と【精神的状態】では、全回を通

じて自身の「課題の把握」、自身の演奏や技術に対する「不安」、次の授業への「意欲」に関する記述が見られた。

「課題の把握」に関する内容では、1回目では譜読みや発声、呼吸、姿勢、表現など課題の内容が漠然としていたが、回を重ねるごとに「弱声での息の使い方」「テンポを落とすと流れがなくなる」など具体化していく様子を捉えることができた。

「不安」については、2～5回目に「練習したことと指導との相違」や「表現したいことができない」「うまく歌えない」という記述があり、常に試行錯誤しながら授業を受けていたことがわかる。

「意欲」については「多様な曲に取り組みたい」「課題を克服したい」などのほかに、より演奏技術を向上させるための「学習方法の模索」や「学習方法の提案」がなされており、自律した学習者への様相が見られた。

2回目以降の記述では、「成果の認知」に関するものがあり、自身が把握している課題を克服することも含め、前回と比較してどのように自分の演奏が良くなったのかを認知することができていた。また、4回目には「歌う喜び」を感じられたこと、5回目には「体心、頭がつながった実感」が得られたことを記述しており、高いレベルでの成果の認知をしている様子が見られた。

ここからは、こうした【状況認知】と【精神的状態】が、それぞれの学びにどのように影響したのかを含めて考察していく。

(2) 【音楽の基礎的内容】

音楽の基礎的内容については「発声・歌唱のポイント」と「呼吸・姿勢のポイント」に分けて考察する。

「発声・歌唱のポイント」に関しては、1回目の授業では特に記述がなかったが、2回目には「響き」「喉の開き方」など、発声に関する記述が見られた。また回を重ねるごとに「喉の開き方」「音の取り方」といった漠然とした記述から、「弱声」や「デクレッシェンドの歌い方」という具体的な記述へと変化している。学習者は1回目で、歌唱技術が習得できるかという不安を抱え、発声に関して自身の課題を把握していたことから、2回目の授業でこうした不安や課題を解決するような指導内容を捉えたと考えられる。また、4回目の「深いプレスで支えを作る」という記述は、3回目の「表現への技術不足」「弱声での息の使い方」といった課題が把握され、「表現したいことができない」という不安が吐露されたこととの関連が想像される。

「呼吸・姿勢のポイント」では、1回目は「腹式呼

吸」という記述だったものが、2回目以降は「深いプレス」や「音楽の流れと息の流れ」というように、歌うという行為を意識した記述が見られるようになっていく。また、1～3回目には「リラックス」についての記述があるが、これは1～2回目の「緊張による影響」を課題として把握していることが影響していると考えられる。さらに、3回目に把握された課題である「弱声での息の使い方」を克服するために4回目には「歌う準備」「歌い始めのリラックス」の記述が見られた。弱声で歌唱する際には特にプレスで体を固めてしまうことが問題となるからである。そして5回目の成果の認知としての「リラックスして歌えた実感」につながっている。

(3) 【イタリア古典歌曲の作品理解と音楽表現】

「作品理解」に関する記述は、1～3回目のみ見られた。初め学習者たちは、歌詞の内容を理解するために楽譜の巻末に記載されている文章の訳を参考していたが、その後、2回目の記述でわかるように、文章の訳ではなく、単語の意味を理解する必要性を述べている。また1回目では「イメージ想像」の必要性を漠然と述べていたが、2回目には「登場人物の具現化」という記述が出てきている。これらは、1回目に「表現」に関する課題を認識していることから、作品に対してより深く想像していくことの重要性に繋がったと考えられる。さらに「音楽表現の工夫」に関する記述の中で、「歌詞に対応する必要性」を認識したことも、「単語の意味の把握」の学びに繋がっている。

「音楽表現の工夫」に関しては、1～3回目は歌詞の内容の把握から導き出される表現の工夫についての記述で占められていたが、3回目に「当時の伴奏楽器の特徴」について学んで以降、バロック時代の伴奏楽器の特徴を踏まえた音楽表現の工夫や、バロックオペラで多用されていた「ダ・カーポ・アリア」での装飾をつけた奏法を工夫するような記述も見られるようになった。その他に、3～4回目に把握された課題の中には表現に関するものがあり、そこから4～5回目の「細かな表現の工夫」に関する記述が出てきたのではないだろうか。さらに、2回目には「聴衆に伝える方法」を学んだという記述があり、それが3回目の「聴衆に伝わる演奏」をしたいという意欲につながっていた。

「音楽の流れ」については、フレーズ感に関する記述が全回を通じて見られた。2回目には、フレーズ感を捉える手段として「母音唱」「指導者の範唱」を用いて学んでいる記述があった。2～3回目の成果の認知において「フレーズを感じられた実感」を述べている学習者もいた。また3回目には「レチタティーヴォ」

部分のフレーズ感についての記述も見られた。

「楽譜の読み方」は、「音楽表現の工夫」を模索する中で3回目から出現した記述であり、「休符の捉え方」とは作品の表現をする上で、楽譜にある休符をどのように読み取り、表現していくべきかを学んだ記述である。その他に「レチタティーヴォの読み方」や「楽譜通り歌う」とはどういうことか、「音符や記号の隠された意味」を捉える必要性など、高次の学びに関する記述が見られた。

(4) 【イタリア語の発音】

対象としている学習者の多くは、イタリア語の学習の経験がない状態であり、全回を通して「発音・アクセント」に関する記述が見られた。1回目の課題の把握の中に「発音」に関する記述もあり、自律的に学んでいくために2回目には「アクセントを調べる必要性」について記述されていた。3回目にはさらに学びが深まり「日本語との言語的な違い」に関する記述があった。また、「発音の修正」が続くことから4回目には「イタリア語が読めるようになるための学習方法の提案」に関する意欲が記述されていた。そして、イタリア語の発音やアクセントの記述は、「歌における発音」の学びに発展していく。

イタリア語の歌を美しく歌うために必要な発音の工夫として、2回目には「不要な母音を入れない」こと、3回目には「子音や二重母音の処理」、5回目には「レガートを意識した発音」についての記述があった。

「詩の朗読」に関して、イタリア語の初学者にとって詩の韻律の話は難易度の高い内容であるが、授業では指導をしている。学習者の記述では、1回目には「イタリア語の語感」や「詩の流れ」を学び、2回目には成果の認知として「朗読による歌いやすさの実感」を得ており、3回目には「レガートを意識した朗読」や「押韻の意識」の重要性を学んでいることから、実感を伴う学びが実現されていることがわかる。

(5) 【ピアノとのアンサンブル】

「伴奏のポイント」に関する全回を通じての記述は、1回目の「歌いやすい伴奏」をしたいという意欲が支えているのであろうと想像される。イタリア古典歌曲特有の学びとして2回目には「当時の伴奏楽器を意識した奏法」の必要性を感じている。また、4回目には「伴奏の演奏」に関する漠然とした課題が把握されており、それが5回目の「歌いやすい伴奏の工夫」の学びにつながっている。

「歌唱のポイント」に関しては、1回目と5回目記述が見られた。1回目は「伴奏を想像した練習」の

必要性を感じ、3回目で「伴奏への受け渡し方」に関する課題を把握し、5回目には「ピアノをよく聞いて歌う」ことや「歌い切った後にピアノに繋ぐ」ことを学んでいる。また、4回目には「ピアノとの合わせ不足」という課題を把握したことも、5回目の学びにつながっている。

「アンサンブル」については、全回を通じて、歌い手と伴奏者の2人で内容や音楽を共有し、作っていくことの重要性を記述している。5回目には「2人で音楽を作る素晴らしさ」に発展していた。3回目に「伴奏への受け渡し方」を課題として認識したのは、2回目の「2人で音楽を作る意識」が生まれたことによるものだと考えられる。

(6) 【他者の姿からの学び】

グループレッスンの特徴でもある他者の姿からの学びに関する記述は、全回を通じて見られた。「音楽的学び」では、他者の声に感動する段階から、吸収したり刺激を受けたりするという変化が見られた。また2回目に「朗読による歌いやすさの実感」を成果として認知したことと関連し、他者のレッスンの聴講から「詩のリズムの重要性の認知」へとつながっている。さらに4回目に、他者の姿から「リラックスの重要性」を学んだことが、5回目の「リラックスして歌えた実感」につながったと考えられる。

他者の姿からは「音楽以外の学び」も得られている。1回目には多様な声の音色や表現方法を聴く中で「違いを受け入れる重要性」を学んだり、他者のレッスンの中で指導者から発せられた説話から「大学での音楽への取り組み方」を学んだという記述が見られた。さらに3回目には「疑問をもって聴講すること」、4回目には「客観的に捉える」こと、というように、学び方への示唆を得ている。5回目には、自分が指導者になることを想定し、「将来の指導方法」に発展させている記述も見られた。

(7) 【既存の学びとのつながり】

「過去の音楽的学びとの関連」では、特に授業の進行による展開は見られなかったが、受験期に受けた指導との関連、合唱での自身の課題の想起、幼少期に受けた指導の意味への気づきなどの記述が見られた。

「過去の経験との関連」に関しては、4回目には「表現の幅を広げるための知識不足」を課題として把握したことが、5回目の「自分自身の経験から歌詞を理解すること」につながったと考えられる。

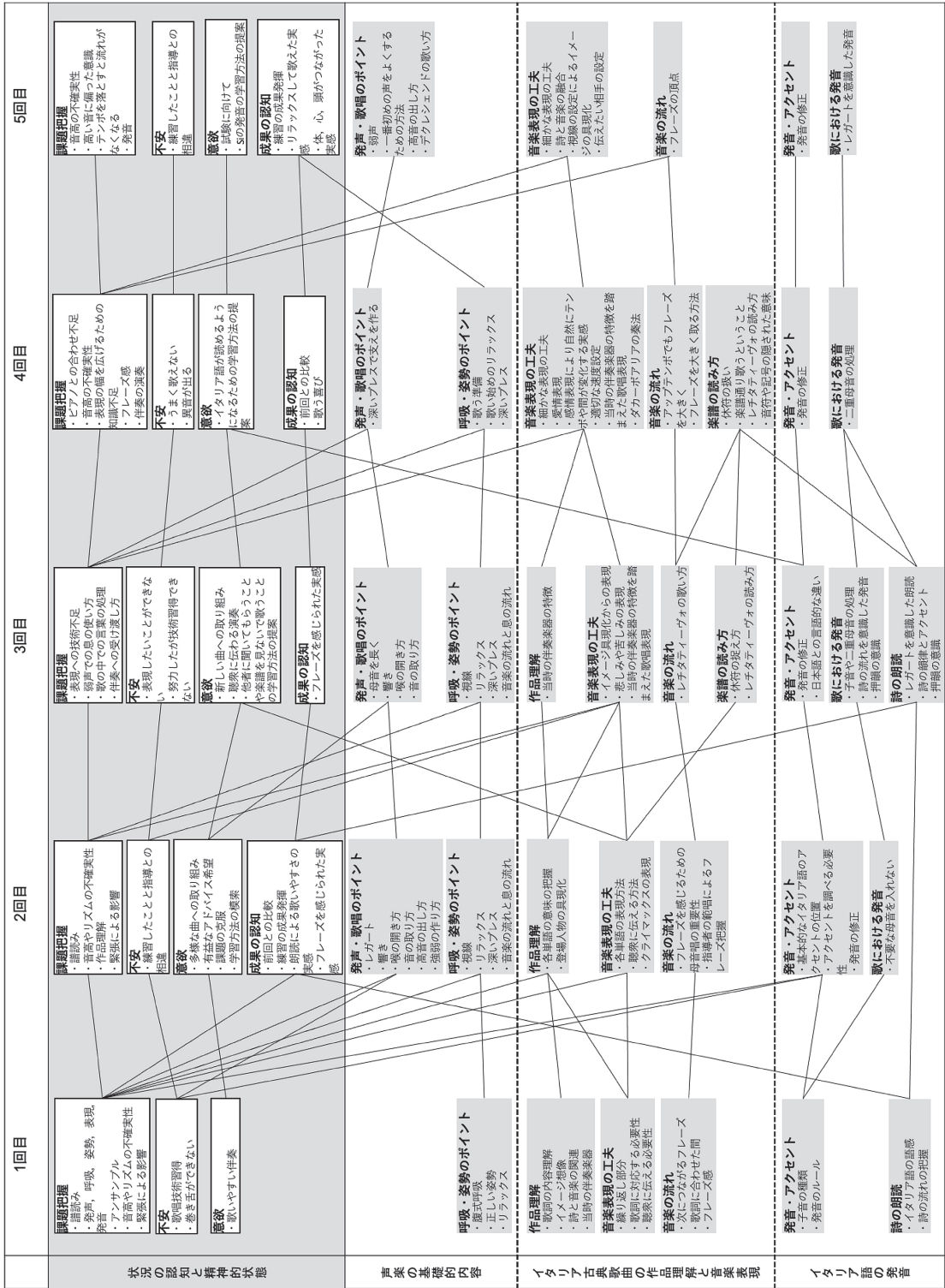


図1 学びのプロセス (1)

声楽初学者のイタリア古典歌曲による学びに関する一考察
 — 学びのプロセスに着目して —

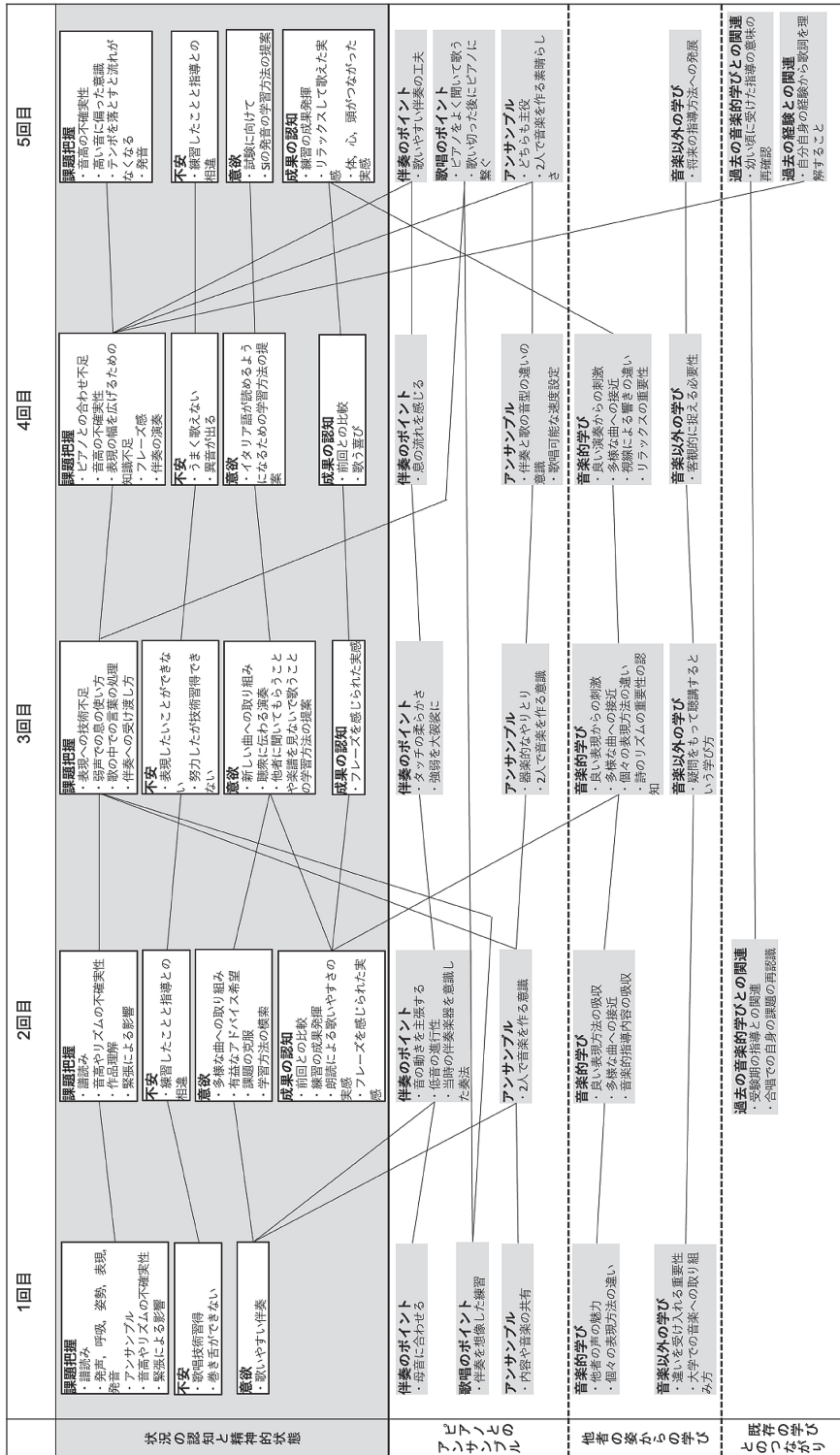


図2 学びのプロセス (2)

5. 今後の指導への示唆

分析から、声楽を専門教育として学ぶことが初めてである学習者たちの学びのプロセスと、それを支える状況の認知及び、精神的状況の関連を見た。学習者の学びは、授業の回数を重ねるごとに、より具体化し、発展している様相を捉えることができた。個々の学習者の実態に応じたレッスンを重ねる中で、学習者は段階的に学びを深めていることがわかった。

成果の認知は、次の意欲や高次な学びにつながっている様子が見られた一方で、自身の成果の認知に関する記述は決して多くないという実態も見ることができた。

学習者の記述から、イタリア古典歌曲を中心とした授業において、多岐にわたる内容を学習者に与えられていることが明らかとなったが、それに加えて「できた」という感覚を学習者により多くもたせることが、更なる学びにつながっていくだろう。

6. 課題

本稿では、授業履修者28名の記述をまとめて分析し

たため、状況の認知や精神的状態と学びとの関わりは可能性の域を越えることができなかった。それぞれの学習者がどのように課題解決をしていながら学びを深めているのかを見とるためには、個別の学習者のプロセスに着目する必要がある。

【参考・引用文献】

- 大野内愛・枝川一也（2022）「音楽科教員養成課程における声楽のグループレッスン指導－学生による授業記録を中心に－」『音楽文化教育学研究紀要』34巻，pp.15-20
- 近藤光江（2018）「日本人における「外国歌曲」に対する声楽学習プロセス－特に被験者の印象評価からの分析を通して－（1）」『川村学園女子大学研究紀要』29巻2号，pp.19-38
- 田中功一・小倉隆一郎・鈴木泰山・辻靖彦（2017）「ピアノ学習プロセスの表出化と変容－SCATによる初学者の振り返り記述の質的分析－」『電子キーボード音楽研究』12巻，pp.4-16